

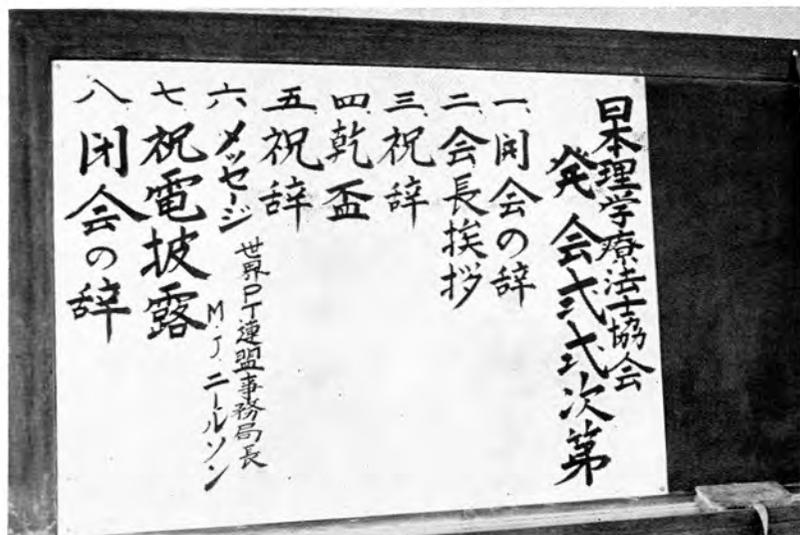
日本理学療法士協会十年史



社団法人 日本理学療法士協会

協会発会式風景

昭和41年7月



上：つつましい発会式プログラム

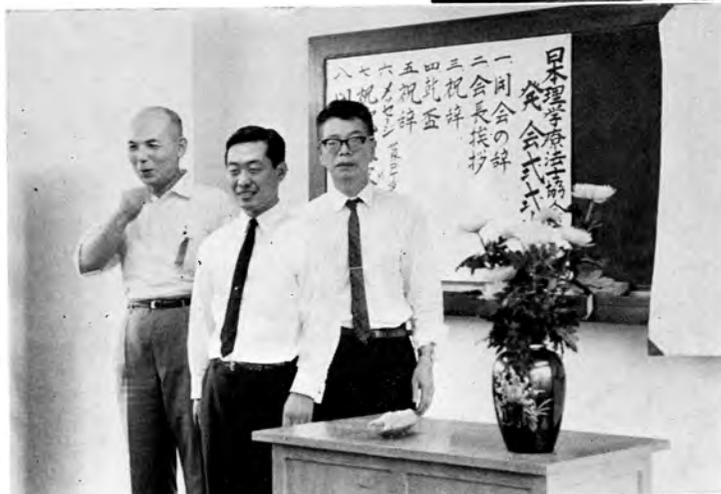
中：会場の受付スタッフ

下左：砂原先生の祝辞

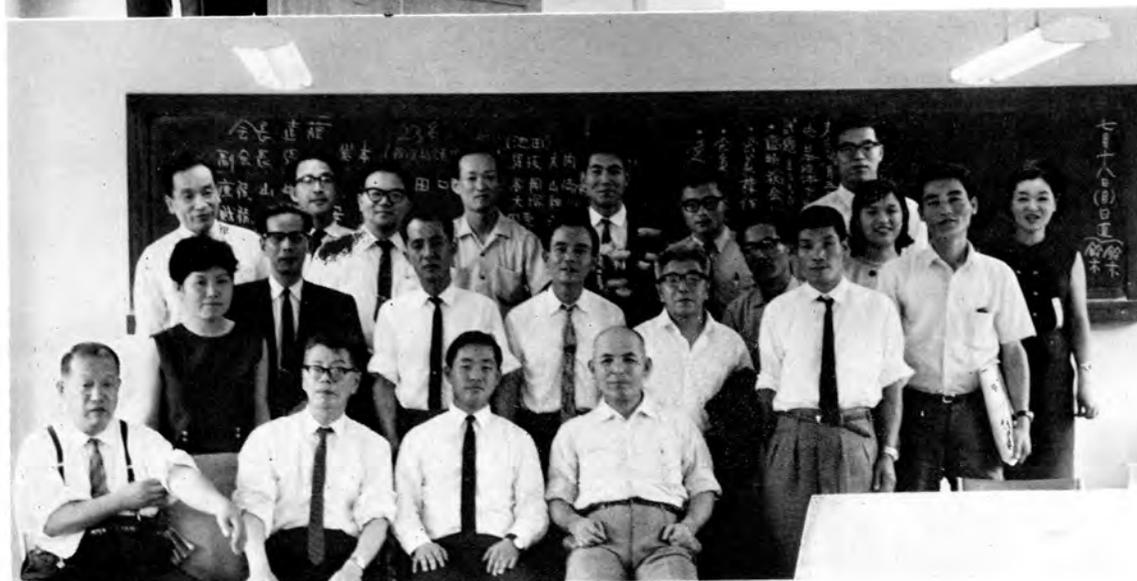
下右：WHO顧問ナッシュ女史の祝辞



WCPTからの祝辞を読み上げる田口事務局長



初代三役の顔ぶれ



設立時の役員



協会ワッペン決まる

祝辞をのべるOT協会代表
矢谷女史



会費出し合って設立パーティ

お祝いにかけて下さった方々

右より小林治人先生
芳賀敏彦先生
佐久間譲爾先生
リドレー先生
矢谷令子先生
佐々木智也先生





上：アムステルダムWCPT会場 昭和45年4月
下左：アムステルダム大会レセプションに参加した日本の顔ぶれ
下右：モントリオール大会
日本WCPTに加盟，昭和49年6月



学 会 の

回 数	年 月 日	開 催 地	会 場	学 会 長	準 備 委 員 長
第 1 回	41・10・ $\begin{smallmatrix} 7 \\ 8 \\ 9 \end{smallmatrix}$	東 京	東 大 病 院	遠 藤 文 雄	松 沢 博 駒 沢 治 夫
第 2 回	42・6・ $\begin{smallmatrix} 16 \\ 17 \end{smallmatrix}$	大 阪	松 下 講 堂	岩 本 敬	山 野 久 和
第 3 回	43・6・ $\begin{smallmatrix} 1 \\ 2 \end{smallmatrix}$	東 京	東 医 健 保 会 館	矢 郷 弥 太 郎	関 川 博
第 4 回	44・6・ $\begin{smallmatrix} 7 \\ 8 \end{smallmatrix}$	神 戸	兵 庫 県 民 会 館	平 川 教 次	古 賀 友 弥
第 5 回	45・9・ $\begin{smallmatrix} 14 \\ 15 \end{smallmatrix}$	福 島	福 島 市 民 セ ン タ ー	山 口 二 郎	小 沼 正 臣
第 6 回	46・6・ $\begin{smallmatrix} 21 \\ 22 \end{smallmatrix}$	東 京	東 京 文 化 会 館	谷 岡 淳	遠 藤 文 雄
第 7 回	47・6・ $\begin{smallmatrix} 12 \\ 13 \end{smallmatrix}$	北 九 州	戸 畑 文 化 ホ ー ル	和 才 嘉 昭	下 畑 博 正
第 8 回	48・4・ $\begin{smallmatrix} 14 \\ 15 \end{smallmatrix}$	大 阪	大 阪 大 学	浅 野 達 雄	武 富 由 雄
第 9 回	49・5・ $\begin{smallmatrix} 11 \\ 12 \end{smallmatrix}$	名 古 屋	市 民 会 館	古 川 良 三	野々垣嘉男
第 10 回	50・5・ $\begin{smallmatrix} 16 \\ 17 \end{smallmatrix}$	東 京	国 立 教 育 会 館 虎ノ門ホール	後 藤 宜 久	細 田 多 穂

歩 み

学会スローガン	主要テーマ	演 題 内 訳						計	参加者数
		一般	共同	特別	症例検 討会セ ミナー	シンポ ジウム	学術映 画スラ イド		
	PT管理と運営			4		1		5	60
	整形外科のPT を中心として	5		2				7	100
	切 断	8	6	2			12	28	300
	ジストロフィー	35		5				40	500
	片 マ ヒ	49		4		1		54	700
	臨 床 教 育	35						35	550
	コミュニケーション	49			2		3	54	600
・理学療法士は障害者の 心の杖にもなろう ・福祉国家への道は理学 療法士の手で	理学療法士の壁	46				1	6	53	700
築け理想の福祉社会, 理学療法士の心と技で	リハビリテーシ ョン工学	51			2	1	3	57	750
	理学療法10年の 歩み	71		(内訳) 2	1	1	3	75	

流　　れ

初代会長 遠 藤 文 雄



10年ひと昔、早いものである。清瀬の片田舎でうぶ声をあげた赤んぼうも、ハイハイ、おすわり、よちよち歩きを経て今や小学生になったことになる。元気な小学生か、たよりない小学生かの評価はともかく生きてきた歴史の重みに逆うすべはない。

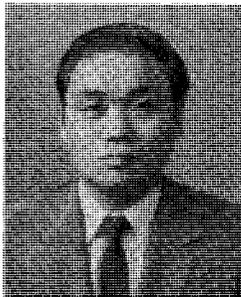
思い起こせば日本のリハビリテーションの黎明期にあって生みの苦しみともいえる陣痛のあったことを忘れ得ない。41年春協会設立準備委員会は学院の卒業生とすでにこの職域で働いていた有志によって持たれ、副学院長の小林先生をまじえ、学院や肢体不自由児協会で数回にわたり会合を持ったのである。準備委員会の主旨にのっとり、第1回の国家試験の合格発表を待って設立趣意書を全合格者に発送し、設立総会は5月、古ぼけた清瀬の看護学院講堂で行った。80余名の賛同者が集まり熱気みなぎるうちに総会は終了し、思いがけなくも若輩者の小生が会長に選出されるはめになった。保田、岩本の両先輩を副会長にお願いして、東京、大阪を中心としたブロック構想がうちたてられ、組織作りと入会をうながしたのである。この会員獲得をめぐる病院マッサージ協会（現全国病院理学療法協会）にはずいぶん迷惑をかけたようである。その後は国家試験の合格者には当協会の案内状を発送するにとどめ無理な勧誘はいっさい行わなかったのである。41年10月には東大において臨時総会、第1回学会というよりは研修会を開くまでになり、定款が出来、WCPT加盟のための代表派遣の件や協会機関誌に関する件が論議された。

当時のことを思い出すと楽しいことは一つもなく、皆がやたらと苦勞していたように思う、私は当時神奈川県七沢病院に勤務していたので（1年生）、事務局のある清瀬まではるばる通ったものである。月給は交通費でなくなってしまう何年かが続いたのである。

当初かかげた目標は会員諸氏の努力により組織はブロックから県単位におちつき、念願のWCPT加盟と社団法人の認可がなされ、協会機関誌の発行をみ、経過措置における特別法も打ち切れ、当協会の土台は安定したと考えられる。ここに至るまで長い長い歴史の1コマ1コマを作りあげてきた先達の努力に、あらためて感謝と敬意を表するとともに、日本の風土になじむべくリハビリテーションの原点を見出し発展させることが当協会のあるべき姿と思う。最後に、協会の限りなき発展と会員諸氏の健康を祈ります。

無 我 夢 中

第2代会長 松 村 秩



昭和44年6月6日、神戸市で開かれた第4回総会において、初代遠藤文雄会長のあとを引き継いで第2代会長に選出されました。

昭和41年から43年までアメリカに留学して、2年半ばかり日本を留守にしておりましたので、協会の内部事情にはあまり明るくなかったのは事実でありました。したがって、当時としては無我夢中であったことだけは確かでありました。

現在の関川事務局長に副会長に是非なってもらおうべく、ご自宅の方に日参したことをよく覚えております。関川事務局長にはいろいろな点でよく助けて貰いました。三役会議を伊藤副会長と3人でよく関川先生の自宅で開きまして、奥様から御馳走をしていただいたことがありました。

私が第二代会長在任中、もっとも印象に残っていることは、やはり国家試験の受験資格の特例措置についてです。昭和46年3月をもって5年間の経過措置が法律的に打ち切られることになっていたのですが、これをさらに延長しようとする運動が起こってきました。この問題は法律の改正ですから、国会で審議されて決まることになります。わが協会は延長反対の立場をとり、OT協会、リハビリ医学会、整形外科学会、パラプレジア学会と一緒に、反対声明とか要望書とかを、関係官庁、厚生大臣、国会議員等に出して反対運動を展開しました。

当時はリハビリテーション医学会の先生方と一緒に、各政党の大物議員に会ったりしたことがあります。約2カ月間、連日のように国会にある議員会館や各政党の本部を訪問したりしました。そのなかで、東大の津山教授と一緒に、自民党の当時の政調審議会長であった水田会長を訪問したことがあります。自民党の政調会長室の前で緊張して待っていたことが記憶に残っております。また当時の自民党幹事長であった田中角栄氏を訪問して下さった先生もおられました。自民党の総務会の会長であった現総務会長でもある鈴木善幸氏に対して、秘書を通じて働きかけたこともありました。あの当時はPT協会、OT協会の幹部連中は連日のように議員会館に押しかけたりして、今から考えても、よくあれだけやれたなという程に皆よくやったと思っております。

この特例延長反対運動は、結果的にはこちらが負けたことになりましたが、延長も3年という期間に限定され、この特例問題も昭和49年3月をもって終止符を打つ結果になったのであります。

特例問題が片付いた結果、わが協会も昨年(1974)の6月に、世界理学療法連盟から正式に会員として認められて、WCPTの正会員となったのであります。これで日本のPTも国際的に通用することになった次第であります。

第3代会長 野本卓氏の想い出

関 川 博

野本氏が会長に選ばれたのは、昭和46年総会の役員選挙によってである。それまで制度としては役員を選出は選挙によるようになっていたが、実際には理事会推薦という形で行われてきた。この総会に会長選挙が行われたことは、種々物議をかもし出しはしたが、会員の総会に対する意識が盛り上がり、それまで中々思うように進まなかった士会結成の動きが急速に進んで、多くの県士会が誕生したのである。

協会は発足以来3本の柱を立てて実行することを目的としてきた。WCPT加盟、公益法人化、業務独占である。しかし野本氏は選挙の結果からくる会員の動揺を防ぐ意味から、会長就任第一声として“組織の基礎固めをしたい”と発表して、選挙の波紋の大きくなるのを防いでいる。私は、前会長松村氏について副会長と事務局長を引き受けることになった。

野本氏の残した業績は大きく、組織固めが終わるや、まず現職者講習、大学制度化対策、公益法人化の実現、機関誌の発行について全力投球する構想を明らかにし、エネルギーに行動した。まさに東奔西走であって、今日の文部省、明日の厚生省と、そして議員会館にと、もう一人の副会長であった矢郷氏と共に行動範囲は実に広く行われた。法人化については、最も困難と思われた全国病院理学療法協会と意見調整を行い、反面矢郷氏が特に懇意にいただいた愛知撥一氏に積極的に働きかけ、遂に法人化の認可を47年1月に受けた。

また47年2月1日の保険点数改正に際しても、日本医師会に日参し、理学療法点数化に重大な資料提出者となり実現している。渉外部長である矢郷氏と共に成果は高く評価されるべきであろう。

教育の面で力を尽したものに現職者講習会がある。卒後教育をいかにすべきかは、常に口にしており、現職教育委員長に奈良勲氏を迎えて、計画を練り、第1回現職講習会の開催にこぎつけ、現在はすでに第7回を終了している。特に第6回の講習会は厚生省との話し合いによって国費で行われた短期講習会に、本協会の協賛によるという字句の挿入せる終了証の発行となったように、講習会の発展は着々と実績を積んでいる。彼が病床にあってまで一番心配していたのは、機関誌の発行である。49年11月30日現在、機関誌“臨床理学療法”も3回出版されたが、この誌の発行までに、資金的に困難の中を随分迷いながら発行するべくあらゆる手を尽した。

この人ほど当協会にとってうってつけの人はいなかったのではないかと思う。常に会のことを考え会員のあらゆる意味の利益を考え努力を続けてき、不幸にして47年12月11日病床につくことになってしまった。協会の財政的負担を少しでも軽くすべく、賛助会員制度を作りこれが運用されている。これ等計画中または実行段階に入った諸事業を、副会長である矢郷弥太郎氏が引き続き実践にうつされたが、矢郷氏もまた急逝してしまった。

代理者の思い出

第4代会長代行 鈴木正彦



昭和48年4月、協会長矢郷弥太郎氏、副会長関川博氏と共に三役に選出されてスタートした第7期は、厚生省への挨拶のあと、役員人事決定の第1回理事会が終わると同時に会長が病の床につかれ、以降私が会長代行として関川氏に助けられながら、理事・会員諸氏の協力のもとに協会運営の責任をとることとなった。

協会運営は、人材をできるだけ広く起用する方針のもとに行われた役員人事の結果、円滑に進んだが、第一の難関は神奈川県から提起された『PTの教育制度に関する協会の基本方針の確認』であった。この問題は協会にとってのみならず、これからの日本の理学療法の質・量にかかわる重大問題であり、3カ月にわたり理事会において討論して結論を得たものである。私の不手際のために、ご迷惑をかけた嫌いもあるが、重要問題について十分な論議のできた事はよかったのではないかと考えている。

9月12日、一時快方に向かわれたかに見えた矢郷会長の病状が再び悪化、遂に永眠され、役員一同悲しみの中に弔問に伺い、葬儀に参列して冥福を祈った。

葬儀の席上、できるだけ早く厚生省へ出向くようにとの連絡を受け、数日後関川氏と厚生省へ伺ったところ、医事課長より医務局主催の理学療法士短期講習会を行いたいとの話があった。これは年度頭初矢郷会長と共に、是非にと要望した事であり、厚生省当局の好意に感謝すると共に全面的な協力を約し、早期委員会を組織してカリキュラムおよび講師案を作成、翌年2月神奈川県総合リハビリテーションセンターにおいて実施の運びに至った。われわれは是が非でも成功させて、次年度以降恒例のものにしたいと考え、関川氏と共に泊り込みで運営に協力した。この講習会にあたっては、神奈川のスタッフ全員の協力と、講師を快く引き受けて頂いた方々の協力により成功をおさめたもので、今思い返しても頭の下がる想いである。年度末には、ここ数年途絶えていた全国病院理学療法協会との懇談会を復活して、日本において行われる理学療法の質をたかめるために両協会が協力する事を再確認しあった。日本理学療法士協会の先人が、積み上げ積み重ねて来た輝かしい歴史の一頁に、会員諸氏と力をあわせていくばくか積み増し得た事を幸いに思う。

今日創立十周年を迎えて、教育水準向上と伸びようとする若人の進路保証、常に向上するPTを裏付ける研修制度の拡充強化等、協会の果たすべき役割はなお一層大きい。これらの活動をより活発に行うためには、公的資金の導入も必要となろう。日本の社会にしっかりと理学療法を定着させる活動を、そして日本において行われる理学療法に責任をもつ協会になお一層発展する事を祈念し、今後も微力を尽くしたいと思う。

第2回学会の回想

第2回学会長 岩本 敬

今回第10回学会を迎え、記念行事の一環として、第2回学会の回想をとの依頼があり、思い出すままにつづることに致します。

協会設立後いまだ日も浅い昭和41年9月だったと思いますが、第1回研修会が東大病院で開催されました。その節「第2回は大阪で」との指名を受け、当時会員数の面からいっても当然だったと思い、受けることにしました。

当時私は大阪大学附属病院に勤務していてすでに大阪を中心とした近畿地区で資格取得者による集談会が行われていたので、これを母体に、中心的役割をしていた浅野君、武富君および西本君等よき協力者というよりやってくれる会員が多数いたので、彼等を主体に準備に入ったのです。まず会期は昭和42年6月としました。これは新たに合格された方々が入会に便利で、かつ会員増しで会の運営が行える点を考えてのことです。ところが昭和42年2月頃になり、大阪大学整形外科の水野祥太郎教授（現川崎医大学長）より「いつまで研修会をやっているのだ、学会にしろ」とのアドバイスがあり、急遽学会に変更することにしたのですが、時期的にみて演題の募集が困難であり、また資金面にも問題が生じたのです。

そこで前者は集談会に出題されたもののなかで補足可能なもの数題を依頼、それに後藤君（今学会長）がたまたまイタリヤより技術交換の外遊からの帰国土産話を願い、遠藤会長および武富君がWCPT総会がシドニーで開催されたのに日本PT協会代表としてオブザーバーで参加帰国直後になるので、この報告会を組み、医師の特別講演と医療機械業者で本会の特別会員として入会している会社の自社製品紹介と質疑応答を加え、一応学会としてのプログラムを編成したのです。

後者の資金面では前記の在阪特別会員会社に集合願い、率直に予算案を提示、援助方を依頼したところ、全面協力を確約して戴き、河村医療社長が世話役をかって下さって、この面でも比較的スムーズに話がつき、学会の準備も順調にはかどった次第です。

次に学会としての開会式の祝辞の問題で、水野教授の援助で日本整形外科学会会長および日本リハビリテーション学会長の祝辞と後援というタイトルを戴くことが可能となりました。

以上の経過で無事学会を終了した次第です。その間先にも述べた通り大阪士会員がそれぞれの分野で活躍、私が出る必要はなかったです。それは第8回学会を見て戴けばおわかりのことと思います。このように学会は恵まれ過ぎたため、総会の運営面での不手際のため、十分討議が行われなまま時間切れとなり、参加会員の皆様にご不快の念を与えた点、当時副会長の職にあった私といたしましておわびの申しようもない次第です。以上、思い出すままの拙文で失礼しました。

緊 禪 一 番

第3回学会長 矢郷 弥太郎

昼下りより降り出した久し振りの雨で、一夜明けた今日の都会は、陽射しも強く美しく何もかも洗い流された感が深い。

明日は成人式として20歳を迎える若者はさぞ胸をふくらませ希望に充ち種々の事を決意して居る事だろう。もう本年に入ってから半月を経過し一日の早さそして、月の早やさをつくづく感じる。

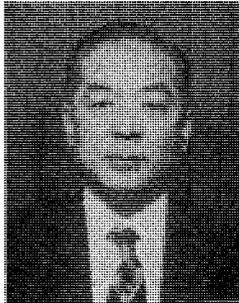
昭和43年の2日は、元旦にひき続いて好天に恵まれ例年の如く明治神宮へ、道々元旦の瞑想に着した如く、昨年の足跡を考え本年の諸計画を脳裡に画きつつ人の流れに従って境内に入る。参拝者は昨年倍とかそれはものすごい人の波であった。各人各様、種々の思いを持って参拝し、決意を誓って居るのだろう、小生もその中の一人で、唯、心の安らぎを得た丈だった。帰りは来た道を、ゆっくりした心地で参拝者の晴衣に目をうばわれつつ、早目に帰宅した。下の娘は、陽射しを背に受け乍ら宿題の書き初めに励んで居る。その姿を見て小生も筆を握りたい意欲が湧き、書く決意をしたが課題が思い浮かばず一寸戸惑った。元旦の瞑想、当日参拝祈願から緊禪一番の四字を書初めとした。

何はともあれ、5月の学会を成功させたい一念である。本学会も第3回目を迎え、その事は「石の上にも3年」の諺の如く、我が協会、学会の試金石として基礎確立の大事な年と思う。本協会も会員一同の自覚と協力にて肉体的には成長した様だが、学会の演題発表となると「学会に望む」の100題説には未だ未だ遠い感がするのである。確かに現在は過渡期のため、学修のあらゆる面に不十分な要素があり、そのため精神的な面は未だ伸びが弱くバランスのとれぬ面が見られるが、然し、本協会に加入して居る病院数から見ると100近くあるので、各病院単位1題とすれば可能な事と思われる。独り行ふ事は凡そ見当がつき且つ限度がある。それ故各病院にて、学会発表研究課目を定めお互いに協力し合い努力して進めば100題説は夢でなく成ると思う。人間の脳で最終的に発達する大脳皮質を何時迄も若返えらせて置くには、目的を定めてその試練に向ってゆく事と思う。「受身では発達しない」、自分で決意し、考え、修業する事によってこそ、高い知的活動が養われ営まれる様になるのである。私も若輩浅学であるが、学会長という大任を受けた以上その試練に前向きをとり闘う覚悟がある。本学会は、学術、技術面のひずみをなくし、とり残された会員が居らぬ様にするため、研究発表に於いて、格差是正機関の役割りを充分に生じたいと思う次第である。

学会開催も、もう手の届く範囲である。お互いに健康に留意して、その日の再会を楽しみに頑張らしましょう。

第3回学会の思い出

第3回学会準備委員長 関川 博



昭和42年6月16日、大阪大学松下講堂で行われた理事会で、矢郷弥太郎氏が第3回学会長として指名を受け、引き続いて行われる総会で、承認を受ける前に学会準備委員長を私にと、交渉を受けた。当時矢郷氏は学会長としてではなく、むしろ他の要職にとの話があったので、彼としては意外といった表情であった。しかし彼は、理事会指名を快く引き受け、学会開催への構想を燃やした。

第1回学会は特別講演のみであり、第2回は会員発表5題で協会の力に見合う形式であった。第3回学会を成功させることによって、PT学会の社会的評価を高めると共に、未参加のPTを協会に入会を促進させるためにも、協会の力以上の学会を計画し、開催することを目標として準備することになった。

当時会員数は200名をちょっと越す程度であったから、自力で開催するには、学校の教室を借りて行るのが一番良い方法だが、前記の事情からホールを借りることになった。借りたホールは信濃町にある東医健保会館大ホールである。実質の学会として第1回ともいえるので、準備に多くの困難と経験不足からくる不安が常につきまっていた。幸いにして東大教授津山先生が、矢郷氏に対し物心両面にわたってご指導ご援助の手をさしのべていただいたことである。現在学会で使用されている協会旗も東大整形外科教室寄贈のものであり、先生への感謝は矢郷氏が世中から感謝の言葉として、周囲の人々に伝えられていた。

学会の内容としては、発表演題も会員数の1/8である25題を数え、特別講演、特別演題、シンポジウム等多彩をきわめ、多くの方々からご高評を受けた。矢郷氏はまたこの準備について、細かくメモをつけ、記録として残した。この記録は次期学会長に申し送り、有意義な参考資料となった。

これまで理学療法の学会といえば、全国病院理学療法協会が行ってきており、PT協会としての学会があるということを社会に認めさせることになった。このことが日本理学療法士協会の存在と学会の認識を深め得たことは大きく、PT協会発展の礎となった。この学会を契機として以後、学会の開催は年々盛会となり、発表内容も逐次高度なもの、PTとして専門職にふさわしいものが見受けられるようになっていったことは喜ばしいことである。

学会誌についても第3回学会から発行された。全頁82頁であり、タイプ印書によるものではあったが、本協会の記念すべき、第1回の学会誌として歴史に残るものであろう。会員数がわずかで資金的にも非常に困難な時代であっただけに、その喜びは大きかったのである。

東奔西走の想い出

第4回日本理学療法士学会長 平川 教次



序 文：私が担当いたしましたのは、昭和44年で当時の協会会長は初代遠藤文雄氏、事務局長田口順子女史でありました。

その田口女史より、今回の記念すべき10年史に投稿を、と依頼を受け、驚きと共に光栄身に余る思いであります。

この10年間、それぞれの特色をもって開催されて参りましたが、私の担当に付き簡単にふり返って見ることとします。

回 顧：昭和42年全国に先駆け、単独支会第1号として会員9名の兵庫で産声を上げましたが、翌43年5月25日、遠藤会長より第4回学会を兵庫でと依頼されましたが、会員わずか9名、準備期間は1年、資金面等で悩みもあり、苦慮の末まず第1号支会の面目もあり、笠井實人医長、松島弘副医長（当時神戸中央市民病院）の全面的協力のお声もあり、実行に自信を持ったが、念のために翌日定期研究発表会後出席者全員に賛否を打診、小人数の利点で意見のまとまりも早く、受諾と決定いたしました。今回は小人数の欠点で、覚悟の上とはいえ、東奔西走の毎日が訪れました。

幸いにして一番悩みの種である資金面も、関東地区は遠藤会長と歩き、地元は県庁、市役所を始め、笠井医長、松島副医長、神戸大学沢村講師のご協力ですべてに達する目算が立ちました時は、すでに開催間近でありました。

また前学会長の故矢郷弥太郎先生の経験談も頂戴いたしました。今思えば、たびたびの上京に私の健康をお気遣い下された先輩が、故人となられるとは、懐かしさより淋しさに感無量であります。

5年後の今日、静かに回顧いたしますと、幾多の苦難はありましたが、私はやはり幸せ者であったと思います。ほとんど連日の如く勤務を離れ、東奔西走できましたのも上司のご理解があったこと、よき後輩を得て勤務上の心配がなかったこと、また協会幹部のご厚情、地元では栗井君を中心に全員の協力を得たこと、次に我田引水ですが、計上不可能な出資も多々あり、その都度持ち出す預金に対し、一言の苦情もいわず我慢し通してくれた妻等々、私の終生わすれることのできない想い出であります。

結 語：受諾時9名の兵庫支会が、開催時には23名となりました。これは学会開催の功勳でありましょう。開催責任者として、受諾から残務整理までの苦勞を膚で感じた者のみか知る満足感を、前述すべての方々のお力添えにて味わえたことは、この上なき喜びであります。

日進月歩を続けるPT、協会最大の行事である学会が、名実共に向上の一途をたどり、ここに10周年を迎えましたことを心底より祝福いたしますと共に、さらに前進発展を願う者であります。

第5回日本理学療法士学会の回想

第5回学会長 山口二郎



期日昭和45年9月13日、14日、15日、去る者日々に疎しのたといの如く、第5回日本理学療法士学会は、もう既に5年を経過せんとしております。当時を今、回想して見るに喜びも悲しみもそれほど深く脳裏に残ってはおりません。

第5回学会は、たまたまWCPT世界理学療法連盟第6回国際会議が4月26日～30日までオランダの主都アムステルダムにて開催され、日本代表の一員として出席したため本学会は毎年5月に行われていたけれども、そのような事情にて春の開催をおくらせて頂きました。当時の協会長であり、また現在も協会長である松村先生も、WCPT総会に日本代表として出席されましたので、本学会を9月13日、14日、15日の3日間に開催することに致しましたわけであります。

何せ不肖山口、第5回学会を引き受けたものの、全国学会となりますと、実際に始まって見ると、東北の片田舎である福島市にとってはちょっと荷が重かったと言うのは、当時福島市内には全国学会を引き受けられるような大会場が無い事がまず一つでした。今なら福島県立文化センター、福島市福祉センター、体育館等と全国学会を誘致できる会場もできましたけれども、当時は福島市飯坂にあります福島市民センター、一つきり有りませんでした。それ以外とすれば、大学の講堂、あるいは温泉旅館の大ホール以外には無かったのです。やはり東北でやるならば、仙台市くらいの都市でないは無理であると言うことを痛感しました。

それでも何とか1年前より手を打って、市民センター全館を借り切る契約をしましたので、開催に踏みきれたのは幸いでした。あの時申込が1週間遅れたら眼科学会福島開催に先手を打たれるところでした。眼科の方ではやむを得ず飯坂温泉の花月旅館大ホールにて開催した次第です。従来東北災害外科学会にしても、飯坂市民センターが借りられない時はやはり旅館の大ホール等でやったわけであります。もしわれわれの学会が眼科と逆になっていたら何を言われたかわからなかったと寒気を催す次第でありました。それでなくとも飯坂と言うイメージのために、温泉場でやったと言うので一部のインテリより糾弾された事が今も思い出されます。また会場が分科会の方が狭くてどうにも仕様がな、PT学会のために特に拡張して貰う訳にも行かず、不備の点は平にご勘弁を願った訳でした。従来第4回までは、いずれも六大都市にて開催され、第5回が急転直下東北の玄関口、小都市開催と言う事で容易で無かったところでした。

次にやはり何と言っても金が掛る事、これは第5回ばかりの事で無く、いまさら言っても始まらないが、金集めには苦勞しました。協会よりの割当金だけでは雀の涙程度でどうにもなりません。

幸い医科歯科大学の野本先生がその方に全面協力してくれたのでともかく上京して、何とかまかなうだけ集まったのが幸でありました。準備委員長の小沼正臣君もこの件ではせつせと、小生の補佐役として働いてくれた事感謝します。ただ不手際が沢山あって、反省するばかりなりけり。先ず、本部への連絡が不十分であった事、それでも松村会長が、遙々来てくれて会場まで見てもらったのは助けでありました。沢山の演題が集まりましたが、分科会会場の関係上、折角の発表も申し訳けない件が沢山あったと思います。特別講演は、飯坂温泉リハビリテーション病院長で福島医科大学第二内科教授吉田先生、整形外科教授鈴木良平先生、生理学教授塚原先生、それから遙々御光来載いた萩島博士に改めて感謝の意を表します。

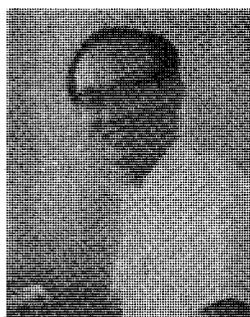
学会最終日9月15日、磐梯吾妻スカイラインの観光を計画しまして参加された方々には喜ばれましたが、一部の会員より学会は飽くまで勉強である、観光とは何事ぞと、お叱りを受けたのには恐縮千万しました。私も、日本整形外科学会の会員であり、その他の学会にも出席していますが、おおよそ最後には観光が付くものであるのが普通のようにあります。それなのに何故本会のみ非難するのかは、当時理解に苦しみました。なにせ片田舎での開催であり、不手際は充分反省しております。もし、もう1回行かならば、もっと旨くできるだろうと思いますが、容易でないので、再三引き受けられないのが本音でしょう。

以上のような訳で、「言うは易く行いは難い」というのが本当でしょうね。まあ今私の脳裏を回想するに以上のような事が思い出される次第です。本当に当時は、会長始め役員の方々の諸先生および会員諸兄の皆さま、本当に有難うございました。おほめの言葉を沢山の方々よりお寄せ下された事は有難く肝に銘じました。

以上を持ちまして当時の思い出の一端と致します。

第8回日本理学療法士学会の思い出

第8回学会長 浅野 達雄



第8回日本理学療法士学会は、第7回九州学会後わずか9カ月の間に準備しなければならないという厳しい時間制約のもとに、大阪士会の全員が日頃の多忙にもめげず尽力し、昭和48年4月14～15日大阪大学大講堂において盛大に開催することができた。その時の感激と喜びは今も忘れることができない。

演題締め切り日に4題のみ、特別講演に変更するも止むを得ないと考えていた。1カ月後に52演題となる。抄録が規定の用紙に統一されていない、半数は書き直さなければならない、準備委員長や編集委員の苦労は大変なものであった。出題者は規定を守り申込むべきであると痛切に感じた。

4月14日午前9時大阪学会のスローガン「理学療法士は障害者の心の杖になろう。福祉国家への道は理学療法士の手で」のもとに開会された。全国から参加された多数の会員、52演題が次々と発表されてゆく、汗の結晶である各演題、熱心にメモを取る、質問をする、学会の雰囲気は十二分に盛り上っていった。合間に設けられた Coffee Break は疲れを治し、久し振りの友との親睦の楽しい時間となった。

シンポジウム「理学療法士の壁」「リハビリテーションの流れの中で」の討論は、荻島秀男先生（東京都養育院附属病院リハビリテーション部長）の見事な名司会によって PT 以外の専門分野からも演者として発表があり、種々問題点を追求し討論された。最後に学会では初めての学会誓言が会員の賛同を得て荻島先生によってなされた。

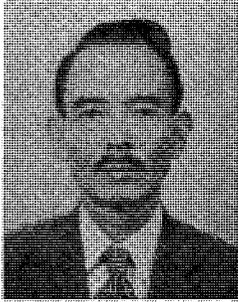
これからも開催される学会の目的は何か。自分の研究、臨床報告、調査、と歴史の浅い理学療法士の社会に発表し、討議され、業績の一つとして残して行くことにあると考える。会員の一人一人が内容の充実した知識と技術を修得し一般社会から認められるよう自覚を持つことにあると思う。学会に参加し、学会で発表し、自分自身の向上に努力することである。

大阪学会のため行政機関、医学界、賛助会員、本部役員、大阪士会会員の方々にご協力、ご援助をいただき厚くお礼を申し上げます。

最後に日本理学療法士協会のご発展と向上を祈り学会を開催された方々に感謝すると共に、今後の学会のご成功を祈願する次第であります。

10年ひと昔

第10回記念学会長 後藤 宜久



手術室に運ばれるストレッチャーの上で、協会の事が走馬燈のように頭に去来した。再起不能の病いに倒れたノモちゃん(野本氏)、不帰の人となったヤーさん(矢郷氏)。古い人間の言いかたでしょうが、二人のための弔らい学会(?)のつもりで引き受けた学会長であったが、今や木乃伊取りがミイラになるのではないか、という不安感とあきらめの交錯した感情を笑気ガスのマスクがスーッと抹殺してしまった。胃潰瘍手術、胃2/3切除。

幸いに術後経過は良好で、自宅に帰って順調に体力は回復していったが、学会場の選定と東京都から助成金を得るための作業訪問等が、のんびり寝ていられなくした。入院中、不性鬚の名残りにのこした口鬚の青白い顔で、10キロも痩せた体でヒョロヒョロと飛び回らなければならなかった。

しかし今や昭和49年も暮れようとして、学会準備は、準備委員長、細田氏、関川相談役その他役員らの努力によって急速に進んだ。会場も第1目標だった国立教育会館に、学会テーマ「理学療法10年の歩み」、特別講演も決まり、シンポジウム、ディスカッションの各出場者の持ち合わせも終わった。経済的見通しも明るくなってきた。

昭和50年、昭和半世紀の記念すべき年は協会創立10周年にあたる。10年一昔というように、PTも言わば曲り角にきたのではないだろうか。私たちは10年間ただひたすらに、ガムシャラに欧米のPT理論技術を吸収してきた。オーソドックスなROM_{EX}は華麗なファシリテーションテクニクに変身し、理学療法は人間工学的基礎の上に考えねばならなくなった。そしてPTが単なるメカカルな意味だけでなく、社会科学的側面からのアプローチを必要としてきた。ここで第10回学会は、理学療法10年のあゆみを集大成し、また、日本の風土の中に生きている独特の理論技術を発掘吸収し、このひとふしである10年を踏み台として、新たな飛躍を期するモニュメントたらしめようとするのが、本学会の趣旨であり会員としての願いです。

学会場のロビーで会員たちが肩を叩き手を握り旧懐を温め合う光景は、本当に心温まる想いが致します。そして学会はその人たちのものでなければなりません。ここしばらく行われなかった懇親会を、本学会では10周年記念レセプションとしてプログラムの内に加えました。

あの東大看護学校講堂で開かれたささやかな第1回学会に、60数名の全会員が参集した当時を想い浮かべて、今日の盛大な第10回学会を迎えた感激を抑えることができません。

この10年のステップ台から協会がさらに飛躍することを願いつつ。

編集後記

いろいろなことのあった10年であった。協会設立パーティの写真をながめながら、あの当時、いっしょに仕事をはじめた人たちのことに想いをはせながら十年史の記事をまとめた。協会の移りかわりや発展は協会の創業期に惜しみなく力をかけた人々によって今でも支えられていることもわかってくる。

10年目をむかえた東京学会では演題が71題となり、会場を急拠ふやさざるを得ないと後藤学会長、細田準備委員長が痛しかゆしの悲鳴をあげている。第3回の学会では、これには到底およばぬ28の演題で、今は亡き矢郷会長が遺稿の中で会員に奮起をうながしている。その矢郷会長が、いずれ協会10年目には大きな発展をとげているであろう、創立当時の経過も薄れていこう、しかし基盤となったものを残しておくためにも、十年史発刊の予算を計上しておいた方がよいと、その当時からこの十年史のための費用が大切に温存されていたのである。この予算計上が当時なかったら今のこの物価高、協会の底をついた運営費、とても十年史の発行は実現しなかつたろう。

編集が終わった満足感どころかあれもこれもと、とりこぼしが多い気がする。何ひとつ面白味も人間味も盛りこまれていないと思う方もいるだろう。しかし、紙面の都合もあつたができるだけ忠実に経過を追うことにしぼった。協会の忠実な歴史的経過の上に、むしろこれからの10年にこそ協会のほんものの味が醸しだされ、充実した記録がつけ加えられていくであろうから――。

折も折とて3月18日国会予算委員会の席上、PT・OTの問題がとりあげられ養成計画と今後の需要度に関する質問が柏原ヤス参議院議員よりあり、永井文部大臣、田中厚生大臣らがそれぞれ答弁している。その中でもっとも印象深いことは永井文部大臣からのPT・OT現状報告と理解である。われわれ会員ひとりひとりの地道な努力が10年間の流れの中で決して無駄でなかったことを考え合わせると、感慨深いものがある。

編集、発行にあたっては第10回後藤学会長はじめ細田準備委員長、関川事務局長の御尽力を受け、また口腔保健協会のご指導、ご協力を得た。十年史発行の実現をよろこび、改めて心より感謝の意を表したい。

神奈川総合リハビリテーション・センター

編集・田口順子

日本理学療法士協会十年史

非売品

昭和50年5月16日 発行

発行 社団法人 日本理学療法士協会

発行者 松 村 秩

東京都千代田区富士見 2-10-4

(東京警察病院内)

〒102 電話 03-263-1371 (内) 255

製作・財団法人口腔保健協会事業部 印刷・三報社 製本・愛千製本